

病害虫発生・防除情報メールサービス

大阪府環境農林水産部農政室

特に注意！（1月）

トマトキバガ



図1 府内で誘殺された成虫

特徴

- ◆ 成虫(図1)は体長5～7mm。翅は灰褐色で、黒色のまだら模様が散在する。
- ◆ 幼虫(図2)は、終齢で約8mm。体色は淡緑色～淡赤白色で、頭部は淡褐色。頭部のすぐ後ろに細い黒色横帯がある。
- ◆ 成虫は夜行性で、日中は葉の間等に隠れていることが多い。卵は寄主植物の葉の裏面などに産み付けられ、終齢幼虫は土中や葉の表面で蛹化する。
- ◆ 1年に複数の世代が発生し、繁殖力が高い。
- ◆ 主な寄主植物はトマト・なす・ピーマン・とうがらしなどのナス科植物。



図2 幼虫



図3 トマト葉の被害



図4 トマト果実の被害

トマトでの症状

- ◆ 幼虫が茎葉の内部に潜り込んで食害し、孔道が形成される。葉の食害部分は表面のみ残して薄皮状になり、白～褐変する(図3)。
- ◆ 果実では、幼虫が穿孔侵入して内部組織を食害するため、果実表面に直径数mm程度の穴が空くとともに腐敗するため、品質が低下する(図4)。

※図2～4:出典「植物防疫所Webサイト」
無断転載を禁ずる。

防除のポイント

- ◆ 発生が疑われる場合は、速やかに病害虫防除グループや最寄りの農の普及課、JA に確認する。
- ◆ 施設栽培では、ハウスの開口部に防虫ネットを設置し、侵入を防止する。
- ◆ トマト、ミニトマトでは下記特殊報を参考に登録農薬を散布する。
- ◆ 被害葉や被害果実はほ場に放置せず、速やかに土中に深く埋却するか、ビニール袋などに入れて一定期間密閉して寄生した成幼虫を全て死滅させてから適切に処分する。
- ◆ 薬剤散布にあたっては、最新の農薬登録情報を確認し、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統(IRACコード)が異なる薬剤のローテーション散布を行う。

詳しくは「病害虫発生予察特殊報第1号トマトキバガ」もご参照ください。

http://www.jppn.ne.jp/osaka/R5th/R5tokushuhou/231031_tokusyuhou01_tomatokibaga.pdf

次回の情報は1月下旬にお知らせします。

◎「防除指針」 <http://www.jppn.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html>

R5年12月27日現在、Google Chromeで大阪府病害虫防除グループホームページが開かない障害が発生しています。
閲覧の際はMicrosoft Edge、Apple Safari等からご覧ください。

農薬を使用する際には、必ず農薬のラベルを確認してください。

水稻(越冬対策)

ジャンボタニシ

病害虫の越冬量を低下させ、
来春以降の発生抑制につなげましょう。



成貝



卵塊

特徴

- ◆ 成貝の殻高は2～7cm程度。田植直後(約20日間まで)の小さな苗のみを食害する。繁殖力が強く、多数の個体が苗を食べつくすこともある。
- ◆ それ以外の時期に被害はないが、個体数を減らすことが肝要。

注)成貝の写真は、農林水産省リーフレット「ジャンボタニシによる水稻の被害を防ぐために」より引用。



防除のポイント

- ◆ 越冬個体は約8割が地表から深さ6cm以内に分布。稲刈り後にロータリーによる水田耕起(耕うんを浅く、ロータリー回転を速くする)を行い、土中に潜った貝を粉碎したり、地表で寒気にさらし凍死させて、越冬貝を減らす。
- ◆ 耕うん機等の土に貝が混じり、他の水田に移動させてしまうことがあるので、移動の際は器具についた土をしっかりと落とす。

カラー技術資料「ジャンボタニシ(スクミリンゴガイ)から稲を守りましょう！」はこちら
<http://www.jppn.ne.jp/osaka/color/tanishi/tanishi2017.pdf>

縞葉枯病(ヒメトビウンカ)



縞葉枯病(ひこばえでの病徴)

特徴

- ◆ 縞葉枯病は、ヒメトビウンカにより媒介されるウイルス病である。
- ◆ 発病した株をヒメトビウンカが吸汁して、保毒する。
- ◆ 本田初期に発生すると、新葉が細くなり巻いて垂れ下がって枯れ、「ゆるい症状」と呼ばれる状態になる。本田後期の感染では、黄緑色の条斑を生じ、出穂が異常となって出すくみ症状を起こす。
- ◆ 本府の主力品種ヒノヒカリ、きぬむすめ、キヌヒカリはいずれも本病への抵抗性がないため発病に注意が必要である。
- ◆ 発病を防ぐには媒介するヒメトビウンカを防除する必要がある。
- ◆ ヒメトビウンカは成虫で越冬するため冬から春先の対策も重要である。

防除のポイント

- ◆ ウイルスに感染したひこばえは、本病の伝染源となる恐れがあるので、放置せず早めに刈り株をすきこみ処分する。
- ◆ 冬～春期に畦畔の雑草を刈り取り、ヒメトビウンカの越冬密度を下げる。

バラ科果樹(もも、すもも、うめ等のサクラ属)

クビアカツヤカミキリ



フラス

幼虫

株元に溜まったフラス

成虫

防除のポイント

- ◆ 被害が大きい樹は伐採し、破碎(チップの厚さは10mm以下を目安)や焼却することが望ましい。
- ◆ 伐採した枝や幹はほ場に放置せず処分する。すぐに処分できない場合は、ネットやビニルシート等で2重に覆う。
- ◆ 幼虫は根部も加害するため、なるべく抜根する。抜根できない場合は、伐採後の切り株をネットやビニルシート等で2重に覆い、内部の幼虫の羽化後の分散を防ぐ。
- ◆ 本種は特定外来生物に指定されており、移動が制限されているので伐採後の残渣処理についても注意すること。
- ◆ 秋に大量のフラスを出している被害樹からは来年の6月～8月に成虫が羽化してくる可能性が高いため、冬～5月までにネットを樹幹に巻き付け、羽化した成虫を閉じ込め、他樹への分散を防ぐ。

伐採後の切株について

なるべく伐根する

伐根できない場合は、切株をビニルシートや肥料袋等で覆う

さらにネットで2重に覆う(根部まで全て)



処分に伴う運搬について

- ◆ 本種は特定外来生物に指定されており、伐採樹であっても、内部に幼虫が潜んでいる場合は運搬が制限される。このため、処分のための運搬であっても市町村の指示に従うこと。
- ◆ 市町村焼却施設(もしくは市町村の清掃工場)で焼却可能な場合は、ネットを被覆する等の分散防止措置を実施の上、現地より運搬して焼却する。

野焼きについて

- ◆ 廃棄物の処理と清掃に関する法律第16条の2により、野焼きは原則として禁止されている。
- ◆ 一方で施行令第14条第4項において、「農業を営むためにやむを得ないものとして行われる廃棄物の焼却」については例外とされている。
- ◆ 例外に該当するかどうかは市町村によって異なるため必ず確認し、なるべく焼却施設にて焼却する。

「クビアカツヤカミキリの生態と防除対策(R5.3改訂版)」
についてもご参照ください。

http://www.jppn.ne.jp/osaka/color/Aromia_bungii/kubiaka2303.pdf

なす（施設栽培）

アザミウマ類



ミナミキイロアザミウマ成虫※

特徴

- ◆ 苗からの持ち込みにより本ぼでの発生が多くなる。

防除のポイント

- ◆ 発生が見られたら、アファーム乳剤、ファインセーブフロアブル、ベストガード水溶剤（ミナミキイロアザミウマ）などを散布する。
- ◆ 育苗期には、モベントフロアブルなど、育苗期後半～定植当日に登録のある薬剤を施用する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。
- ◆ 雑草はアザミウマ類の生息場所となるため、ほ場内および周辺の除草を徹底する。

たまねぎ

べと病



べと病（苗における発病） *

特徴

- ◆ 育苗時や定植後に、被害残さ等から感染し、越年罹病株として1～2月に病徴を現し、周辺への伝染源になる。越年罹病株は、葉色は光沢のない淡黄緑色で、生育も劣る。

防除のポイント

- ◆ 越年罹病株は取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ ジマンダイセン/ペンコゼブ水和剤、ダコニール1000、ランマンフロアブル等を予防的に散布する。

あぶらな科野菜（キャベツ、こまつな、しろな等）

根こぶ病



キャベツのしおれ症状と生育不良*

特徴

- ◆ 定植後1ヶ月頃から晴天の日中に葉がしおれるようになり、やがて葉色・生育が悪くなり、激しい場合には枯死する。

防除のポイント

- ◆ 発病した株は、根ごとほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ 収穫作業は未発生ほ場より行い、汚染ほ場を拡大させない。
- ◆ 汚染ほ場の作業後は、機器や履き物等を洗浄する。

菌核病



キャベツでの発生

特徴

- ◆ 暖冬・多雨時に発生が多い。
- ◆ 黒いネズミの糞のような菌核が土中に残って伝染源になる。

防除のポイント

- ◆ 菌核が土中に残って伝染源になるので、発病株は、菌核を落とさないようほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ キャベツやはくさい等で発生が予想される場合は、結球開始期からロブラール水和剤、ベンレート水和剤等を予防的に散布する。
- ◆ なばなやレタス等、本病が発生しやすい作物との輪作を避ける。水田との輪作は防除効果がある。

農薬を使用する際には、必ず農薬のラベルを確認してください。